畫筌

畫具製法
畫法口訣

一

E
150
1

五十八ノ箱

逍遙文庫
文庫6
1296
1

筑前魯軒林守篤　編述

畫筌

浪華　書肆　保壽堂　養心堂　彫刻

畫筌序

本朝騁響於丹青者豈止數十家而已耶雖然靡倒衆史獨步古今者雪舟已下不足數焉若狩野法眼元信者絶妙精巧所謂畫家百世之師也其流風氣韻瀰漫乎天下

文庫6
1296
1

紙筆以爲業濡墨爲勒者不知幾千萬人本州佳士狩野法橋幽元者探幽齋守信之門人也奉仕邦君擢爲畫師其爲人天機所到素以爲絢兮故曰繪事後素守房其庚乎自夙齡游畫工之藝研精於溪石尋思於山水親受習於幽元翁縻丹粉者有年于茲矣頃曾奮中華暨本邦之圖籙爲粉本自目之曰畫筌蓋平日師所施與己所彩秘傳口訣紬繹出而似罔有遺漏然非欲示之達者庶授

之庸工宜爲畫道之楷範矣
只恐淺末之才管中之見難
免乎杜撰之誚也因自顯數
語爲之序云旹正德壬辰孟
春吉旦筑前直方林守篤

凡例

一卷首載六法三品而妄加臆見爲之和解後學者訂正之則幸甚

一所題畫論傳受之篇師小方守房常談于門人之語也辞固雖卑陋畫學秘要在此篇豈可不盡心哉

一畫彩之種類及製法悉記之深所畫工之秘者也

一凡山水草木禽獸蟲魚人物鬼神之類皆有眞州行之筆法雖不一定必有規矩種類各分部門而述之彩法之序不令其先後乱之不其精詳者厭多而省之

一凡引用書又不多如圖繪寶鑑立翁畫傳圖繪宗彛本草綱目大和本艸本朝食鑑列仙全傳本朝畫史聖賢像贊佛像圖彙花譜和爾雅倭漢印圖等畧撮其要以爲畫工之一助也

一凡所圖艸樹鳥獸器財等之狀悉以而不要似于真矣但隨畫家之法而已

畫筌卷一

目録

序　凡例　六法
三品　十二忌　製作揩摸
觀山水賦　畫論傳受秘事口訣
墨色　骨法　筆勢
習畫法　描草木法　筆法
寫形法　彩色法　畫意

地挽法　繪押朱印法　繪刷子圖
繪筆圖　切箔之圖　繪具製法極秘傳

畫筌卷一終

畫筌

我本邦馳譽丹青者代々多其器雖然畫家者流各有所長與所短而未嘗見多間然矣近代加法印探幽齋狩林坐信則胸中造化意匠生物動植飛潛諸品得之心而應于筆通神之妙豈有長與短之譏乎百濯古今蒙一使手矣執之前孔紙之義者探幽齋之門人而善畫者也林守篤子亦得其傳於探元義以來寓思丹青多年勤不倦孜孜自騰爲

探函而函之翁笑之策勢可保記丹青之法欲惟後世人
志其能而免世俗傳之懺焉守篤而習勤矣盛習予曰畫
有六法三祖之傳識之予曰不敢爲昔鄭波馬聽伎人歌而
言使石季倫問其曲鄭云不知季倫笑曰卿不識曲那言
佳鄭答曰聽言如見西施何必識姓名然後知予於後學
亦然雖不知猶事亦識其名佳矣子復莫言問者領而去
於是予書旨享保辛丑小暑

浪華　予任專安叙

平性
雲間山房

畫筌巻之一

筑前直方　隱士魯軒林守篤　編

六法

一曰氣韻生動　守篤竊ニ按ずるに氣ハ縱ハ鬼神人物鳥獸草木等万事ニ到ることそれぞれに皆靈氣を含て其氣を出し氣を吐活潑々地する活る者と雖ども但其用ゆる筆墨に描出すとして其氣神ふのまざまして筆上の能ざる所毫釐も欠ることなきものこそ

二曰骨法用筆　骨法とハ画の骨描のことくにさう法ハ骨一つ是を以て上手下手を分るものこそ法ハ強直なる法ハ混和ニ乳貴潤ひて光沢あり泥ぶるして輕ろやかなる

世二よハ往古より今ゟ至て名人の流儀を立置さる格この
筆格を分て混雜なさ格ゟ心と分て学へし格ゟハ
ら格と云を格ふと又ハ真行草の三格と分るし大中小の
筆法を能く分て作へしこれの如く色畫の骨法ゟ
又人を畫へし無と云ハ弱重賤硬平まして圓ゟ
淋且多と格ふしと知ゟ到て言語ゟ述ること味ひ
多し強ハ固ゟ淋義の世一國家の主宰ゟ到てよくし
これものなりを

三曰應物寫形　ものの形と物毎ゟ好相違すれ
格ゟ寫とこれ雲ハ天ゟハ信実傷賢ハ人如の
風をあらハし樹ハ硬草ハ柔ゟるの數と又絹や紙ゟ

大小ゟ依て相違する格ゟ違し

四曰隨類傳彩　ものゟ形の數ゟ隨て似合の色を傳
へし又強の質畫の真草行ゟ周て活色の淋源淋流
を作へし

五曰經營位置　強畫ハ色りのとなむと模格を深
く地強を出ること絹の中ゟハ人物といかとて事
形像ハかくのごとくにしてもひ又屏風ゟも就ゟ
をかくんゟん場の一二數めを畫の後ゟたるゟハ大樹
を出ゟトゟハ出ゟ同くゟ藻ゟ万年ゟ牡丹かと
の數を事へトゟ格ゟ浸ゟハ心を如事て氣の股ゟ
格ゟし大樹の格ハ地ゟして採消本の強ゟハ岩川を

あひしらひ三口牧めよい指を下つを牧すしまちまよい雖
地ようと大多と一裏まちかい小畜と怒さまの合同しとの
多沉指よ乱て出又沖多を二川もつも交て撲指を
引ちる指ようしまを牧めよいをと出筆の無の沉の多
仙かとと半口はの沉め指よ雪の鶴の水札おと半てち
しよい清かまと半ちを多二よ小多と花也遠ふかどとを
半て凡て恰好ちさ指み同筆するが強雲ち同筆て
描別い注意ふしん婚姻の屏風よ忘ものあり多札
一孤出ちと山鶴又ちかい不吉の数を豊意とへし
遊花かとハ花の君ふしてて周子の色しまて貴ひ
用四いさ苦ちり

六曰傳摸移寫　唐一通る人ちを繪本と借受て腰
地とちさる紙よ吹しも光と贈密貴一の寶ちに光と粉ちを
とを比るのちるへし凡萬を写よい粉ちを写に光と勢
とに粉ちと扱さる時い画と指ことあちこと貝利も多沉
粉ちと次て一流とちと又ちの写に光るよ格と覚るなり
古人の筆孫と多集て凡列つ描写と川するよ周く
貝利も如と神仏の時い写しても筆勢よ力多く節く
新て志まるず光沉多しよ指ゆの指よ指て潤く
ちく志まりて義と古ちまる仙されと一流くゆ指ちなり

神品　三品

氣韻生動出於天成人莫窺其巧者謂之

神品　愚謂人生れて二三歳の比より畫を嗜みて幼年
の遊び戯に絵を好て描んと欲る小児とも能そろくと
雖名人の作に劣て劣り功至業熟し老い若人
に及ぶ事を描とする故神霊を具足し
妙品　筆墨超絶傳染得宜意趣有餘者謂之妙
品　術を好熟し格式を越法を離て描とのつも法を
傷ることなし
能品　得其形似而不失規矩者謂之能品　善法と
なして格式を定へ法者とする又老人及ぶ
ものなり
十二忌

元鏡自然曰一忌置拍密二遠近不分三山無氣脉
四水無源流五境無夔險六路無出入七石只一面
八樹少四枝九人物傴僂十樓閣錯雜十一溺淡失
宜十二點染無法　右立八翁畫傳より

制衣作揩摸
帝王ハ天日龍鳳乃表と崇ル儒賢ハ忠信礼義の風を
あらハし武士ハ勇悍英烈の顔を多く貴戚ハ侈靡な
容を尚人隠逸ハ高世の節を識す仕女ハ秀色嬋嬙乃
態に宜し田家ハ醇朴野の真あり釈像ハ善巧方便
乃顔あり道流ハ修真度世の貌と具ル外夷ハ異を纂
欽順の情あり天帝ハ威福厳重の儀を明す鬼神ハ

醜態馳進の狀を作し畜獸ハ筋力精神毛骨源起
を倚し一禽鳥ハ毛羽翔つて舉て飛集の形を尚ん
魚龍ハ游泳の妙升降ふ定まらず水ハ濕なるを
動かさ〻人をして活潑潑地の妙を感ぜしむ屋宇ハ形勢
鬱として等要均壯深遠空を透す器物ハ四邊乃
景候あり陰陽乃向背筍條の老嫩芭蕉の后之自
然艷葉間野園蔬の形等咸出て生るの体性なり
たゞしか古人乃高論多くとも能人の者乃知らざるこ
故なられを畧し

山水を觀賦　山水とハ山川海人家をこと
乃山水を畫に云ふよの在里丈山人樹する豆

人此を法なり遠人目なく遠樹枝なく遠山皴なく
隱ことして眉の如く遠水波なくして雲と森し此その
決なり山腰ハ雲塞つて石壁ハ泉塞つて樓閣ハ樹塞
乃路ハ人塞つて石ハ三面と背す此その決なり凡山水を
畫て尖峭ものハ峯巒重なるものハ嶺峭壁ものハ山崖
完ある者ハ峭石まくるものハ巖形圓なるものハ巒丘谷
を夾ものハ壑丘山水を夾ものハ澗水川を注ものハ溪泉
通る者ハ谷路下のを山ハ坡陀を極て平衰なる者ハ坂なし
能辨別せも別山水乃彷彿ることを知や其を觀るこ
と氣象と看法を清濁と辨へ賓主の胡撰とを能能
の威儀を別ぬ多くれて別記るがくれて惰る多くす

ゆゝずゝ遠色と初んと奪せし遠山は色水と連らこうを
滑ど山腰は寺と回抱しゝ安ぶべきと觀よ新屋乱拙ふを
山樹と蓋へしゝ路ある所よは人行あり路をさゝやよは林木あり
嶽巖の古木は根と露して藤纏流よ陰む石等は山厳
穿つして水痕あり乱林木を作して遠は別疎平なは
別高突山たり葉あるものは枝乗よ多ふ別さもものは硬松
皮は鱗よ似柏皮は身よ纏出よ生ずる者は脩長つして正直
石よ生する者は拳よ曲りして伶俐古木は節多くして半を
死す寒林は扶疎すして蕭森たり乱山水と畫よ須
四時と按ずべし春景は別雰消煙籠樹木隱こ半を
して遠水よ藍と揉山色推まるなり夏景は別林木色

よ世散ひ緑世平坡雲と穿瀑布水よ迅く幽亭秋景
は別水天一色に結ぶる跡林屋烟寒よ接つる芦洲よ
鬱る色景は別地と雪ふに老樵影を乱ひ漁舟多り
倩ひ水流く沙平すして凍雲黯淡たり酒旗孤村あり
風雨は別て地と分と東西を辨ずゝ別人の傘蓋漫又
の蓑衣あり風ふて面なくは低樹枝と着よ面ふく風
ふくは枝葉下り垂る面霧ふに雲收つて天晴すして薄
霧凝る山光翠ゝと深ゝ綱と斜暉よ晒す暮景は別
山嵐日と暗こ帆は江濱よ節に人行急すして半は紫霞
を撞ゝ或は煙斜よ霧接つて或は遠岫よ雲鎖つて或は
秋江を隔んよ波つを古塚新碑半法布置に方よ岐り

際に成筆よ山水ハ花草ゟ成筆ゟ紙得ず精沢ハ教西禅
すゝ成得されゝ意を此よ留る者ハ須心よ玄微を含
すゝ

畫論傳受秘事口訣

夫畫の爲ハ言語文字を以て得へきよりあ事也
心通するよりあり其の爲て知る者ハ皆見を立後こ
得その言語よ得る者ハ或ハ知り或ハ知ず一ハ精く一ハ
疎なり故よ情とも情学て約るする者ハ皆見を文
字より得神よ周て博識を以て精く熟しく
知て神よ到る神霊ゟ知る者ハ畫工の神品なり○
六法三品或ハ何人の流といふことを云されゝ御功者

ありと云と上ゟ成又法の傳不格或ハ能知ゟ
御第諸の定りゟ成ものあり見を下ゟ成ゟ路の秘
を初心者と云う也ゟ功者ゟなる法ゟ量ゟ知て得て
功者となり上ゟ成る見能ハなり法ゟ名人ゟ成る見
妙品なりゟ成ゟ神品ゟ畫聖ゟ成ゟ
聖ハ生ゟ成ゟ初と云て情学て精くするまあ成
畫聖ゟ成ゟ下ゟ云て又一品あり何ゟ学て
心ゟ得を常ゟ怠ゟ成ゟ成ず一代下ゟ
孫ゟ犯す天性ゟ畫意を更て生されゝ何秘精と入く
勤ても上功ゟ成ゟ成ず○或人問て曰法を事ゟ毎の
ゟ粉本を用て出ものあり又不用して描ものゟ成見也

いかに守義答て曰畫本を用ゐて毎日我さうに
作らく描ものハ下手の不級者なり粉本を用んと欲する
わるく描ざる畫品あるくとハ常人ハ難へず唯迂者
なる者とハ茲に用て己が学も異端に落入り孤子言
名をうるとも己学者の深く思ひ乎や但又一種
あり功者とハ上方ハ各別なり論ずるに及ず毎日
粉本を用て古人の規範を遠ず正しくと描んと欲する
者ハ己が思ふを知り古人の聖なるを悟るを以て度
畫のなるよろんと自ら傍らと教へ神靈と探らんと
欲ス者ハ己を以てあれとと功を描こと必を若ること
を絶と背ざれたり

○師守房曰畫の要ハ輕

乃一字に止のを故に意以て輕く以て重こと重輕と
雖ども文なり故に初学の畫品皆如し此を以て輕ハ畫
の性なると知へしとも初て極彩色の描うとハ輕墨の
ことをわるこるに茲を以て心得へしなを
茲大抵なると心得へしなを以て述るさし
卜師曰の二法ハ樂朴なるよろし茲に描こと多うを
とや猛へて繪てこそ霊が出て活ず墨色墨色ハ
潤うよし武人曰潤ハ自然の如く但に偽あり描う狀を拙
しくなるを扱へて醇てあへし又深墨も淺墨も等に多
含て渇ざる物に要とりて書んはあれと必光沢あり
て佳なり手退てあれと察に全言し骨法骨法ハ

互ひるると以てようとを兵法にもかくと流
みずからのこともかくさるるを
筆勢とわるへし変ひさくと利ハ出来て
筆勢 筆勢ハ強がよく弱られて強へきをわるを揮て
精心をかるすハ師巡元紙て曰守信恒よ不地も当紙よ
筆をる不紙多ハ破出て皺筆をかるる色筆勢の強めへ
習畫法 強と筆ようを強とをんとぐせん粉なをとて
焼筆をして大紙を些くとし紙の大小よ意ずる指ようて
よくいを用ようく焼筆をまとなてはをて粗くとくひ又粉
なをとんて筆へ〻師の曰初んるるハよく粉なをと足合なを筆
ようを遠さる指よ筆へ〻又大概強のをとをはるとて強

て強なを紙きんとすれを筆ハ濃て光沢なく筆勢
犯すを強だとて神人の老ものを紙とすれた強の
弁ほろひて精霊なし慎むへし〻〻○畫工〻〻ん
者ハ方をすもとを彩色工なり光の畫強をよく筆へ
面目をん粉なをんて強て畫強を筆をよ紙よ地を
して強毒粉なをとて焼筆と有て足合せ若い指なし
指くちひ墨をて何千変も筆て強の筆を膠よ筆よ
そのうちよ筆筆をんとなて非筆のかき指をはへし
紙神人の時ハ心得ようもの筆れて兵年月へて自ら指をん
○をくさだうしよ強と筆んよ筆紫ものの如く産と
ものハん指をて紙を孤皺とをなて筆へし御されを

ぬくもとして氣が脫てあし

描草木法　草木の枝葉花実とかくて叶さらんやうに無用の枝葉あるハ俗し人形の衣を文理すくなきよし　古人ハ多くかくるもあり高流見て用ゐとなり○草木の彩色を用ゐるに色ハ集めて禁ずべしいへ共畫家ハ論色法俗ハ捨て陽数をすべし

筆法　筆法ハ気風を好へうす或ハ切ハ切ど繼へきを絶ぶと紀響の和ハ氣と分へし古筆ハ汗ばと巡らぬく筆ありあり

寫形法　物の形と描ハ言生ず似くあるやうに成

○和人形をも人を描ぬくすべし　高流と謂て髮を長く鬢無あるやうに成

描ハ言生ず似くあるとハ生ハ似もして為さあり

生ずり似て氣とハ常の法なりを物生ハ似もして若と

ハ見別法乃法得是口訣を門ハ入もして見と知とを

うす見初んの及ざ不ハ或法とハ生ハ似ど分ハ

無学の評判と云て笑て用ず法ハ学勝と無ハ細

あり凡法と学ハ初狀と初ハ次ハ骨法と学ハ孫ハ

をさとるあるハ或ハ法の及ざる不あり

彩色法　彩色ハ

淺をとりて見ハて四ハ法の俗なり彩の極さハ学

初学ハ彩ハ彩ハ先ハ必ず深見と次て淺の若なること

と知へし彩色の深ハ法ハやしく生て死す地法ハ死も彩

法て種ハ尚て活と下上の者も老上なるハ學法面ても彩の

淺なんざると成て光沢あるを上功のもるを彷彿

あり惣て周密にあつかへり凡其功の者ハ地絵と古事出ても彩色
の塗悪なる必すおほくひとく勝し其皆埋の色をもかくへざる
ゆゑ大概其肯とおもへても機に熟する事の周に為る悪きもの也
○彩色ハ機に熟す機に臨て変に熟して機とハ地絵の
真ハ行草と云之真の行其の草行の草其の行
其の草なと云ことあり大旨描によりゆかし浅ハよし深き
いやし古筆の絵ところに当流に法をも描によりて彩ぬし
あれこそなしも絵へし極彩色の絵にも軽と淡とを忘るべからず
や済をといふ肝要之乳絵の味ひといふハ縮り堅実なるも
これらす実なくて乱雑なるも為にあらず唯中庸にして
浮沈とつり合せよくしてさつぱりと泥なく絵の本意也

さらにしとくるこ不及なく時に中す其れの思案と週
へし○彩色ハ筆を用ゐる塗て洗ふべからず是ハ塗出て
又塗ざるわとに洗て数ふしるかるへし塗て後周くなる
故に固くあれを抹ぶべく筆に奥を多く含をそさるべしと
等りけくして其の擦るやうに又色の濃うぬ程に中より浮
ん輪よてぬるべし擦てハ乾光沢なく文理あしく色の濁れて
縁の週て潜篤なあしく先に秘わり紙に尻よく当てしみの垂
とこ筆の毛限の紙にわさらぬ程に空とを乳をて楽ん滑
肝要なり　畫意　凡て絵を学ぶに其絵を知るによらず大きさ
是心本とす純宗とせり極彩の絵さり凡此らの文模様
網をはらうようにしけをさらぬ程に此彼よて踏しみんとおもふ

深淺も三分うして色を一川絵おいたらひ筆すすおよ
まし〳〵行なのさと沙丸意出すべく〻すこひ入と含こし
白紙も模様の四方れぐ〻ふれをへし芽本も注用乃
枝葉さ事へ〻〻〻〻〻〻万物皆ふう異国の絵ハ文のめく
大和の絵ハ物のあしとし絵ハ詩のうくら絵ハ絵のさとも
いつるを異国の絵ハ実をて深く風雅うに〻し色彩物の
是ふにはよされる工なうう大和絵ハ座上とをて席中を
弱にも弱ふの函古今ハ超し数明なう我の探出流
又千家ハ秀て奇妙と出をう

地挽法

一要の比挽ハ要
と為して二三篇引へしめ〻すれと和るかつとうとし
てよし永真脚ハ要と拾をて一篇引とそ絵ハ比

引とす也厚と出て若ふ深くれぐいやし
くれをふまらぬ人合所為と芽本の絵ハ物〻くハ
孔のあ絵ハ絵ハ面白し繍綱乃ハ遍

総論

淫古の絵畫の人万物と描ハそ絵ハ記ハ
もあ〻ぬ若と用くを遍ぬとし改へしそへ山水ハを
比ハ踏をしてあれと半舎獣も意くり新とあくこ比
拙物の数も亦ふう畫ハ絵わ〻さんや○本朝古今
畫士名誉なる者多し絵といへ共わに絵畫の妙曲
なるハふりぬ玄賞弱すべし淫畫ハ實と真と経
と倣絵ハ行と若ハそ擬なう○萬限と探こしむ〻く
軽すべし美すれぐ氣の絵てあ〻とし○凡絵ハ何人

の流ゐなどゝ云ことハ古人の手跡ハ
用て風かゝり抜流ゐ○法と云ハ的たるすし
所程若分して勤ゆゝ人なハ遠ゐ色のすしとそ
○墨用ハ生淳ハ古法と不論して新法ハ去なる所ア
私ハ描て畫聖の所ハ反して異端の邪法となるそ畫
所ゝの所ハ遠ゐと云ゐ○粉本と用るハ古くハ無
畫の墨色をみて古法ハ法ひ学ハ必新品ハ劣
○尚家ハ多く朱と用ることハ禁ハ朱色多ハ強し
強ハこつゝらとすゐ又聖像なとハ雨色と用ひず
但抜墨さゝひかとハ新ハ○雪舟ハ法ハ下筆なと
と板判として押跡ゐと多しとゝ○工作ハ傷人形ハ

古法眼より軽して上の妙ありと作ハ為用の物ゝ為者
元伝ハ絵物の物ゝ為者ゝとそ○元伝の学ハ家風ハ
用月と金和武ハ為論なとと手のゐて推牙鳳凰ハ
鄭の毛筆と皆繊綱ハ為者ゝ尚流ハ為れと禁法
○鶴の法ハ眼を清して学ハ師曰兎法の法ハ
あ法工匠ハ為ゝ○松蒙ハ不為用ゝ法ハ
用ゝ工の学ハ作ゐとそ○師曰畫祖と知事
や顧愷之陸探微張僧繇吳道玄これゝしとそ
○衣笠守昌ハ為ハ当房れ法と義称て云実ハ為法ハ
学ゝ人物ハ勝ゝとゝ○松の茂枝学ゝし守昌云
年月ハ用と用て必ゝ学ゝん

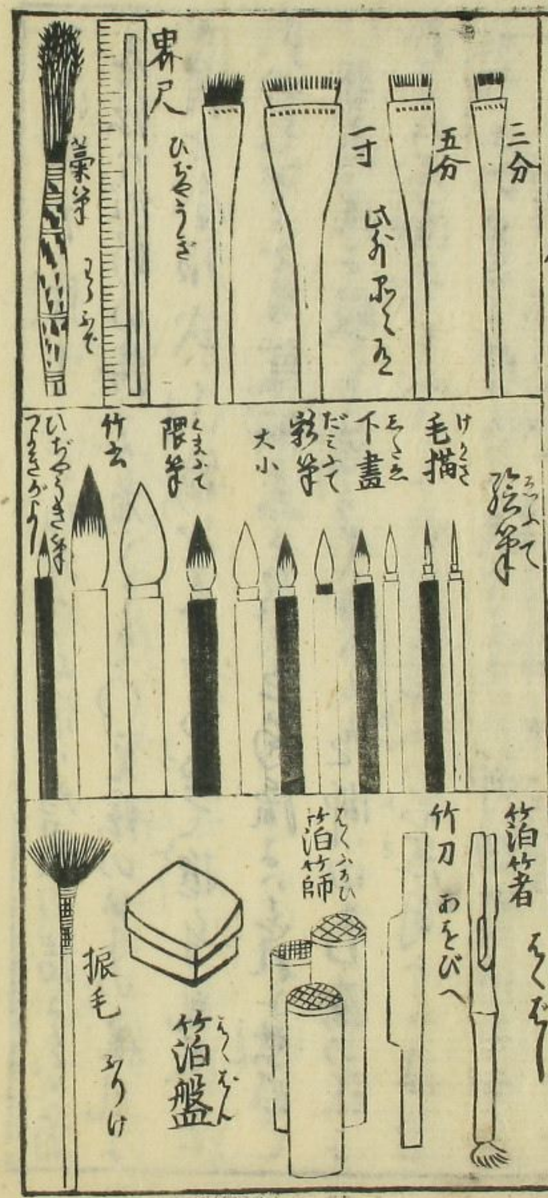
押朱印法

法ハ朱印と押ゝ法

の強合よ水にて色を拭ひ不ハ強の後ハ押へ〜するく押と書れこそ
紙に水をおいて書して押で作るくうつり敷も動るこ泥ハトの脚
分色ともいやしき彩色よくと月の明らよ〜

繪部みり

二分三分
丈六寸五分



切箔之法

畫具之制法極秘傳

緑青　沼緑色ハ石之類より出る畫史曰緑青の中より
撰ひとり○制法ハ先ん緑青を櫓鉢よ入て膠を加へ石の
乳木にて粉おし研て又上の濁ぬとるハ四ヶ所へ
底よ貯て探と茶を一畫緑青といふ文色ヒるの皿に
記新て紙て底よ付と二畫緑青と云又氏清水とこ
おの碟よ入て壱一夜月を経てこの清る時清水と換
水よ付ふるとき紙日よ乾て揉を白緑と云ふ又次くを

ゆうかたてとくしゝ紙摺ハ皆白く
なる故よわし摺ていねとくへ又水も膠も入て研と数十度
す色ゝ氏膠を入ることい膠の粘と持て緑青の細末なる
とり出をくめし榴色よ沸ぬと炭とに指て摺ねよハ
熱湯と次て膠とをかゝ又白緑碟を入る水をかも弃
ずして榴色よ絹て摺なりもるずて榴色よ新水
と入こすを色ゝ濁れ多成ゝ白緑摺よ絹ゝ濁て捨分
時ハ白緑すゝ白くゝ白ゝ緑青と用る時ハ四ツ
絹てゝ水を入浸て次よ膠と濃煮て鰾鏡入を画を
側えて筆と投じ畫と塗へゝ○愚曰緑青を色若
画ゝ色白色ゝて黒色なくゝ光あるを良とし又青

黄ゝて黒色多きハ悪ゝ見ゝ指色多用の法ハ
別ゝ記ゝよ述とし
二番緑青　製法ハ已よ述る色ハ紅ゝ分名殺と
書ゝより○孫ゝと雲彩　先白緑と以て色と淡
く塗ゝ次よ二番ゝ又一度ゝ一緑ゝ色
ゝ濃ゝ濃多入て筆濃ゝ交てゝ塗へゝ
ゝ色ゝ化の法ゝを分ゝ指と次て墨淡と指て
塗へゝ○草木の葉ハ白紙と草木の汁ゝ次
緑ゝと一二番ゝ塗ゝ草木の葉ゝ白草木のしゝ
別曲とゝ色ゝ緑ゝ色ゝ枝葉の末ゝ
濃水ゝ色ゝて塗ゝ色ゝ

白綠　石末の極細とめり又蛤と米と神製法する
　　附い熟濃にして膠とにてつくる干影色こと

紺青　こんこ製法い孫青の同し膠と濃合て用ひ
　　これと搗て群青と出る孫青より白綠と出るかゆし

大田氏曰紺青は搗と入て用るよこと搗は粘ハ真の
　　紺青不頭ハ花紺青こと　凡紺青とはるよハ初淺黄とはること

淺紺　畫史に白青を塗云群青と見ハ紺青塗の格式
　　衣裳にてとれり武ハ章に用ひ

花紺青　硼石と燒てつくる云搗て膠と合て用ひ

銀朱　本草に石亭脂と水銀とを合て作ると搗く
　　あと八膠を合て用ひ上に淡のうと黄色といこと

和漢朱の色同しかつ和なよこ

朱黄色　人面の作色に用ひ

朱墨　朱と墨と合と但南流に丹と合と膠をわかせす

黄丹　鉛と硝と合て作るとこと研て若細末に時
　　あおぎく入て搗て膠と合て作

丹具　丹に鉛粉と合く用ひ但肉色の赤に入なり

肉色　丹に鉛粉を加へ○朱とはるに肉色とはる丹
　　と塗り次に朱と丹と合くはり上に朱とはる一名濃紅

生燕脂　一名綿胭脂　立義畫傳に調脂とあり唐に生
　　用るこをとこざり茅の汁とも云燕脂とも云深こと新
　　古絹をとかつり皿に入て筆を以て畫てこと云日下

ゆし用又炭火の上よ乾すべしよし

墨燕脂　生ごんしに墨を加へ膠をいれず

生燕脂具　蛤粉より生ごんじを加へ別淺紫なり

燕脂　蛤粉より藕末の黄蘗を加て作る細より拵て膠を入

燕脂具　ごんしに蛤粉と合て膠を加へ

胡粉　三種あり白堊大ごんと云也是胡粉なり

たうの　畫家より用ひ蛤粉をまろかれつを焼て作るなり

云　拵てあとより記加へ粉にして膠を加へ夏月ハ必ず

くさりやすし曝すべしと用てよし

藤黄　唐うり来る海藤樹を切て煎煉して作るとも

雌黄ハ用れよりあらず四より人名を加へて拵し墨拵らし

藤黄具　ちうりよ蛤粉と合て膠を加へ

藤黄具褐　ちうごんを墨丹を合て

靛花　藍澱を乾らし帛より包て水より投じさしく蒸て

庶汁出るあと弱て庶汁ときはれとちりる膠を入色に

浅葱　あいらうより蛤粉と合せ膠を加へ

草緑　万宝全書ハ　苦緑　万宝全書ハ　緑青より藤黄と合てあい

らう多と壊緑と云ちう多と老緑といふ粉拵を加へ色

黄土　ちうとくすりて水と練を加へ

黄土具　黄土ごんと合て練を加へ

黄土褐　黄土より赭を栄と合又黄ちうとより茶とうる

紫土　ちうを焼て作る又云栄と云ものをちう深おく

しやくも云よく搗て丹と膠を加へ

紫古奥　ちとうり胡粉と合膠を加へ

紫古褐　紫古のごとめり茨黄とくる或ハ赤黄わいらう

と合ル或いこうんちとる雲ちとうと合と

墨奥　胡粉と雲と合せ膠と加へ鼠色と云乾漉と加へ

藍奥褐　藍奥とめりて茨黄とうるうるとハ又めることし

褐　丹と茨黄と雲と合と膠を入ゞ又朱雲胡粉と合

とよちとうとうく孔

合黄土　古朱標とも云ちう茨黄と丹と合膠と加へと

青鶴色　白緑と茨黄と加へ膠を入るも褐も萌黄とも云

金翅鳥色　白緑と苦緑と加へ或ハ白六と合黄古と加へも云

肉色褐　丹鬱金とも云肉色のとよちとうと鬱倍生代云

紅色　せんあんと塗とよ生あんじをかくル

紫藤色　肉紅とも云濃葱と胭脂おし加へ

濁色　赤色　生あんじ代々と塗　金ちとうく孔

金泥　滴と碟と入膠を一滴入て中指と無名指とと浄く

ちとうと研み二滴と入て糖のとよて温て又搗し加此すること

数十度とく回来して泥のごく如く湯を多く入て数刻

居さて底と沈て深水と捨て泥糟をかりさり

膠を加へて使ふ　貯置ハ古乃如し炭火にて焼て

至て泥とめる事也とハ黄膠とめる泥ハ周とお除けく

塗ハ〳〵又茶を塗もよし　或ハ茂英の莫或ハ肉色
又てみの黄濁濃して第の茂英中入てゆるもよし
黄膠　朱と蘇英を合膠を多く加てゆる
銀泥　銀箔をけしてつよく洗ハ金泥と同し　蛤粉膠ゆう
して泥と塗る
雲母　搗てふると粉と加へ白菊の上ゆ有て光をあ
銅青　京緑青と云本草滙ゆ醋と銅ゆ緑生ずと
脳乾とよく搗て水と膠を合せ又水乾して使もよし
銅白緑　銅緑ゆ蛤粉を合せ膠を加ゆ
黄明膠　牛皮皮を煮て作る是をよく透通らハよし
ゆ浸し煮て端の強を加ゆ○脳膠の方　冬月ゆ

膠と強ゆ納也上ニ雪と多く積ミ数日至雪落て為
となう膠うるびて柔ゆ加ると乾し煎て用ゆ
明礬　透るがよし　書に生を粉ゆして蛤礬水ゆ
ゆ用ゆ〳〵
○守篤曰瓦器のうとと研用るゆハ餅煉と云事あり
神に乾研して能く搗て水ゆ為徽し入て研ねると
うるぶて光ゆくゆ為て研る

畫彩補遺

石青　研て為乾ゆ為て三種ゆ頭青二青又曰三
青又曰云一種石青堅して碎へうる者あり年垢と以

お許除入るれば便研細うして泥のめり

朱砂　すなわち辰砂なり第一紅の者と用てよし

銀朱　第一朱砂をうんで紅朱と成くられよ代

珊瑚朱　唐畫の中より一種紅色久を歴て変せるあり

解たるごとく朝日乃如し　宣和内府印色も赤多此を用

雄黄　丹砂の法に第砂と同し　畫よハ黄黄と人家にも

用ひ但金の上に用るとぞ　金箔ハ雄黄とつくれば数

月の後変て惨色となる

石黄　此種山丹の中用るよ悪と雄て細研　松皮及ひ

石黄ふよこれを用ひ

乳金　金泥をうすく二指と用て周くまで摩擦

傳粉　給粉を用て微過し研細ゑ和して用ひ

調脂　其色指よつさて是ハ邵ゑ泥ゑ金

藤黄　紫黄黄とかつられものこれ如く樹とくまで数黄ハ

を畫の間よ入て枝幹と描よ便蒼潤を出ス

赭石　これ煙墨して色墨ゑるものとなるし製法石緑

と同し

赭黄色　藤黄ゑ赭石を加ス

老紅色　銀朱ゑ赭石を加ス

蒼緑色　草緑ゑ赭石を加へ初学の者ゑ用ひ

（今ハ紫粉と用ひ）

畫學道統相傳 並 自家傳来

僧如拙 九州人也 住相國寺 — 僧周文 號春育 住相國寺 — 小栗宗丹

狩野正信 — 同元信 世號古法眼 — 祐雪

直信 號松榮 — 州信 號永德 — 孝信

法印守信 號宮内卿 探幽齋 — 法橋守房

小森俊春
大田守章
林　守篤

早稲田大学図書館
011688993662